

寺樹怪石は、
 花のつからな
 る風色に、此
 街道にしくべ
 からず。土人
 上古の遺風を
 うしなはず、
 言語都會に異
 なりといふと
 も、又雑言の
 ある事有。こ
 の懸象毛、混
 まはへは、中山遊
 を誦し、此類
 御後野より類

樹怪石のたのしみは、
 花のつからな風色に、
 此街道にしくべからず。
 土人上古の遺風を
 うしなはず、言語都會
 に異なりといふとも、
 又雑言のある事有。こ
 の懸象毛、混まはへは、
 中山遊を誦し、此類御
 後野より類

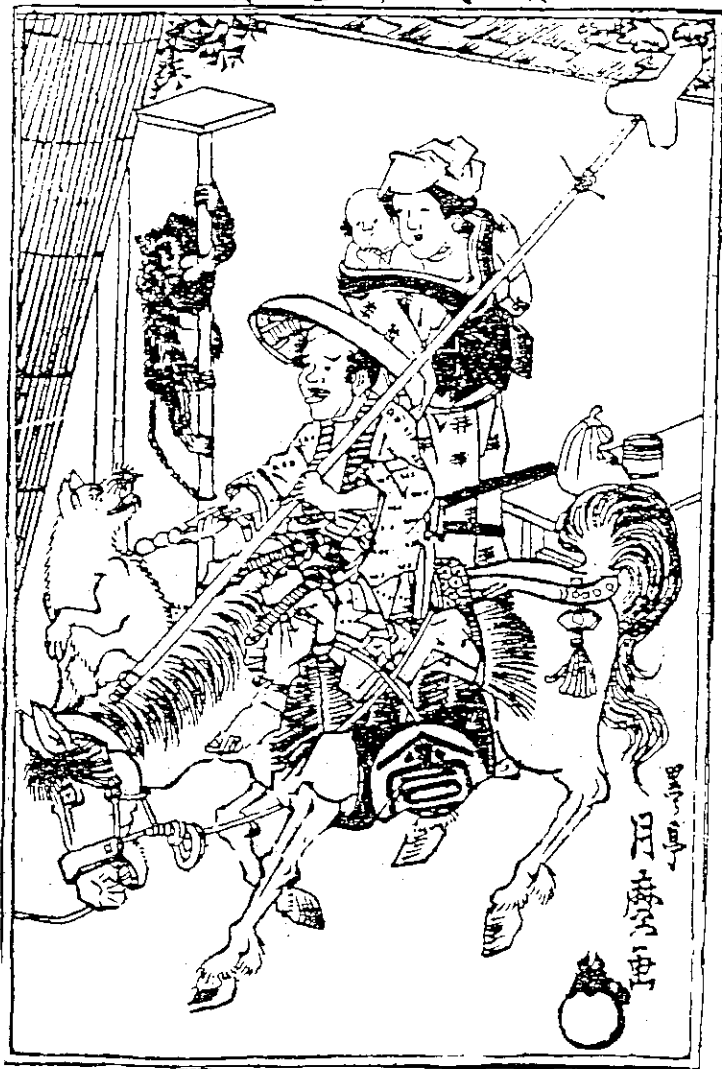
さ木曾路とい
 ふなれば、殊
 段のおもむき
 變化し舞地の
 ありさま特別
 なるを趣向と
 して、板五編
 に彫つけのも
 のならし。

本曾路といふなれば、殊
 段のおもむき變化し舞地
 のありさま特別なるを趣
 向として、板五編に彫つけ
 のものならし。

文化
 十返舎一九誌

文化成春
 十返舎一九誌

景光中藤原景光



和漢三才圖會
 續日本紀云文
 武天皇大宝
 二年始開美
 濃國岐孫山
 道自元明天皇
 之頃
 人專往還

(ト、引もどされて乗物をかつぎしにんそく、)
 「ハ、ハ、コリヤ佛がらがうた〜
 (ト、あとへ引かへす時、この門前もとほりす
 ぎたるくわんをけも、うらたへて寺の門へか
 つぎこむひやうした、出るのりもの、棒と、
 くわんをけのぼうとつきあたりしはすみに、
 のりものをかつぎしをとも、くわんをけを
 かつぎしをとも、あまのけさまにたふれて
 はふり出せば、くわんをけもなはがきれて、
 中からほとけがころがり出すに、みなくお
 どころきあわて、かのをしやうをひつとらへ、
 くわんをけへいれんとする。をしやうあきれ
 て、)「コリヤ〜なんとする〜。ま
 りやら」何さらすのぢや(ト、大ぜいをつき
 のけ、たゝきまはす内、のりものをかつぎ來
 りしにんそく、)「コリヤアお怪我はない
 か。はやら〜(ト、これもうらたへまち
 かへて、權太ばうすをひつとらへ、何いふを
 もまかばこそ、のりものうちへおしこみか



つき出す。さいりやうは大ぜいをしかりちら
 しながら、かんじんのだんなどの、したゝか
 こしのほねをうちたるを、かいはうしてゐる
 うち、のりものはさつ〜とかついでゆくを
 見て、さいりやう又きもをつぶし、)「コリ
 ヤ〜乗物まで〜(ト、よこかへす。
 のりものからは權太ばうすがとび出すを、た
 たきちらしてやう〜をしやうをたすけのせ
 たるに、みなくおてうはふをわびことする
 やうす。彌次郎きた八、しじろあとよりついで、

て來り、をかしさこらへられず、大わらひし
 て、)

すでの事しんだ佛とまちがひて
 あぶなく寺へいきばとけさま
 ふたりは此いさくさを見捨てゆくほど
 に、はやくも細久手の驛にいたる。
 貯のなればこゝろ細久手も
 何いとふべき肝のよとさに
 それより矢瀬の辨財天を拜し、琵琶
 味にさしかかりて、

やせ澤に辨財天のあるゆゑ歟
 霞ひくなるびわの山坂
 かくて大久手の驛ちかくなりければ、
 此あたりの宿引みな女にて、ばら〜

と立かゝり、ふたりを取巻、女「あまの
 さまがた、ちとせりぢやあろなア、何屋
 へいかつせる。通「いかさま、もうとま
 りだらう。北「笹屋といふがいつといふ
 事だ。女「さ、やは、がいにおとまりが



あるでナア、わしとこへお出まいか。
 通「マアささ〜へつてからの相談さ。女
 「こゝではナア所の定規で、ひとくみよ
 り外に、お客様とめる事がでけぬとい
 で、どこへお出てもせずやうがあらま
 いにナア、わしとこへお出なされ。お
 つれさまはさいくたり。北「影法師とも
 によつたりさ。おめへ御馳走をしなさ
 るか。女「なんなといたしませずナアサ、
 アお出まいか(ト、まきにたちて、ふたり下

をこればきキかて大久手の宿に入り、かけぬけて、(女)これでござります。おさんどん、おとまりがござらせへた(ト、此うちていらしゆ、みせさまへかけいで、)「コリヤもう出た。コレはさま、お湯とつてあげさせへ(ト、やがてふたりはあしをあらひ、おくへとほると、まつそくふもわきて、入しまひたるころ、此宿のめしもり三人づれたて、客のある内をそよりあるく)うま、わしがあもひは深山の猿よ、かく手はあるが、文をやらすはつてがない。あつちいはん、おとまりがござらせるか。女はう、「みんなあがりなされ。さいぜん釜戸の金太さまが、いこ入組でちやあつたぞい。あしもりやアだよ、わし金太さまたア、本山からの馴染だアけれど、アニハア、見たくでもないよとだア。こんちう、お伊勢さまへござらせへて、かへつてからハア、



かみがたの女は、みんなまい器量だア、かんべいが、そんたいにやア、わしらここの女郎衆とくらべちやア、お月のやうに、姿だアの、米だアのと、つさまと泥鰌ほどちがひ申すと、それはかして見なさる、いくちやアござるまつかしいひめさつたが、ソリヤハア都の女衆だアから、まりやうもがいによざらないが、たほこそいつぶくすふう

下 五 毛栗屋

ちにはやア、ふと田やひたうすはちやのこでござるわ。ふとを馬鹿にしたこんだア(ト、いひつゝさしきへきたり、)女「コリヤハアよくとまらせへました。おまいがたまびしかんべい。ふとりよんでくれさせへ。おハ、アおめへがたは、爰の女郎衆か、買ってへが銭がねへ。女「ヤレハアおさのどくなこんだア、わかしてやらすに、金サアこへつん出しなさる。おハ、おとんだおしやれだの。なるほどおめへは心中ものだ、かねを出したら銭借す、厭やろながさいてあされらア。女「じようけたこといはつせすと、買てくれはつしやい。ドリヤいつぶくすつていかずい。おイヤ此女郎衆は、たばこの吸売を手のひらへはたいてのむな。ハ、ハ、ハ、ハ、女「アニハアそれがをかしかんべい。わしどもの手のくぼは、蝟だらけ



だアから、お客さまにやア、がいにすひつさ申す事よ。おハ、ハ、ハ、ハ、(打)わらひていでゆく。「の内ぜんをもちいで、くひしまふと、すぐにふとんをもち来り、とこまをそんなの手をとらへて、)おハ、コウたアしりませぬ。おハ、ハ、野暮な子だ。

下 五 毛栗屋

コレナ〜。』その男の相手になりな
ざるな、宿^{やど}かきだから。なんならわ
つちが所へきなせへ。』北「ニ、また邪魔
をする。コレ〜じやうだんぢやアね
へ。どうだ〜。』女「ヲホ、〜、なぶ
らずとこはなしななれ〜。』ト、つまたふ
してかけてゆく。このうち彌次郎兵衛手水に
行しあとへ、としまの女きたり。』女「おち
やあげませす。北「コリヤ御ちそう御ち
そつ。時に今こへ来た女中は、うち
のむすめか、奉公人かへ。』女「このぢ
うからやとはれて来てぢやが、なんと
しをりせした。北「イヤなんともしねへ
がとんだい、新造だ。おめへどうぞあ
の娘を取持て、後にこへよこしてく
んなせへ。』女「ナニあの子は、今に替戸
へ猪の番にいなせをりませす。北「ヤア猪の
番とは、こへらへ猪が出やすか。』女「出
せりませすとも、いつにそこなでのね

きに、畑^{はたけ}があります。毎晩畑あら
しをります。此ちうから小屋^{こや}をこまへ
て、それへ番にやらします。北「そんな
らそこへいかうか。』女「ヲホ、〜、
ホいいななれ。この替戸ぐちへ出
るとしれませすに。もうさかたげなら
れ〜。』ト、いひすて、かつてへゆく。此内彌次
郎手水よりかへり、二人ともぬけると、ヤ
がてかつてもしげまり、しゝを追ふたるこの
おとのみきこえて、せけんもひつそりとなり
たるに、きた八ひとぬいりして目をさまし、
まじくじしてぬたりけるが、此みちにつか
ては、まめなぞとこ、そつとねどころをぬけ
いで、どうづにゆくふりして、せんがへ出
て見れば、そりふし月夜にて、はくちうの如
くなるに、せつちんのさうりを出してはき、
にはへおりたち、きり戸をあげて、うらのか
たへ出かけ見れば、むかうにしゝとやとおぼ
しきが見えて、むしやうになをこをひくおと

しけるゆゑ、さてこそと、そら〜ゆき見る
に、そのしゝをおふ小屋には、なるほどせん
こくの女のおますれども、男のおまもきこえ
て、二三人もゐるやうすに、きた八これはつ
まらぬと、あとへすて〜もどるはたけ中に、
何かはしらす、おとし穴ありて、ふみはつし
ておちたりけり。』アタ、〜、〜、コリ
ヤなんだ。エ、とんだところへあつて
ちた。あいた〜。』ト、あしこしそ
いためながらあがらんとするに、よほどふか
き穴にて、ことさら四はうまつたでのやうに
て、壁のごとくなれば、なか〜あがる事も
ならず、とはうにくれてゐたりける。これは
しゝをとるおとし穴にて、このへんにては
するごととなり。いかに井戸の如く、まつず
ぐにふかくほりて、穴の上にはほそまきされ
竹を、すこの如くならへ、そのうへ〜そつ
と、はたけのつちをならしおき、猪をおひこ
んで、こへおとす所なり。また八かゝるあ

なあることはしらす、そのくされ竹のうへへ
のりたるゆゑ、竹をれてしたへおちたるなれ
ば、かほもからだもひつこなり、そこちが
うが、ひり〜すれども、そこ所ではなく、
こゑをあげて、北「ヨ、イ〜たすけて
くれ〜。コリヤだれもさ〜つねへ
はらだ。エ、いめへせしい。ヨ、イヤ
ヲイたすけてくれヤアイ。しぬわいヤ
アイ〜ト、壁のかぎりよびわめけども、あ
なの中に、そとへろくにきこえれば、た
れもいで来るものなし。北ときぎしきにては、
彌次郎ふつと目をさまし、せつちんへゆきも
どりがけに、氣がつきて見れば、北八がねど
ころに見えぬぞ、ふしぎにおもひ、北「コリ
ヤどこへいつた。また八〜。はてふ
しきな〜ト、らひつとあんどをさげて、
かつてのかたへ出、そこらうさ〜見まはす
と、てしめ目だままし、てしし〜誰でや
誰でや。』アイわつちだが、つれのをと

こがむしきに見えやせん、こつちへは
まわりやせんかね。ていしゆ〜ハアそれは
どこへぢやあろ。しよんへんにでもむ
びらせへたもんであらず。』北「イヤわつ
ちが今も、雲陣へいつてそこらぢう
たつねやしが見えやせん。ていしゆ
』ソリヤどうでや〜ト、おきいで、彌
次郎とうちつれざしきへ来り、また八がきて
ねたる、よきふとんをふるつて見て、ていし
ゆ「ホンニ見をせつせ〜ぬ。もし、そこ
までの、ふるしきづ〜みあらためて見
なされ。その中ぢやあらまいか。』北
「ナニとんだことを〜ていしゆかつての
かたへむかひて、北「コリヤ〜おつち
ヤイ、お客さまひどりうしなちかいた。
のししゆすから〜女ばうねばけたこまし
て、北「ソリヤア戸棚の引出しに入れて
あらずな。ていしゆ〜はうでや〜。まつ
れまは 戸棚の引出しにこぼらせる

と、〜、〜、それでまあおちつ
いた。』北「ナニとはうねへ。かみさまソ
リヤア、何が引出しにありやす。女はち
「わし〜ふは、此ちうの皮足袋のこん
でや。ていしゆ〜何こをる。皮足袋のこ
んではない、お客さまでや。』北「イヤサ
さつきまでこつた、その皮足袋が寐て
居たが、ハ、アきこえた。大かたおめ
への所の女衆のねどころへ、夜道にて
もいつたものであらう。ていしゆ〜ハイ
わしもうこに三四年もやど商賣
してをるが、皮足袋が夜道にいかずこ
たアつひにき〜をりませぬ。』北「イヤ皮
足袋ぢやアなかつた。つれの男の事よ。
エ、どこへいきをつたやら。また八ヤ
アイ〜ト、むしやうによははるうち、
うらのかたにてもしきりに人のよびわめく聲
するを、かすかにき〜つけ、ていしゆ〜ヤア
替戸でも誰やらわめきをる。』北「ハアほ

んに、あれが鑑に、つれの男のこまだ
こまだ、いしむしむしつて見て来ませ
ず。ドリアン(ト)でうしむまうか
け出して、うちへ出れば、はなげの中にて人
をよぶこするぞ、ゆき見れば、ししのお
としめなれて、いし「ヨ、イ」。ていし
だれだ。さき客が。ロッキヤが
らとこへ、なととしてさすつせつた。
いむつだ。はあどうもあびて
くんませへ。ていし「せえんから、そ
こなでこへなで、さつへんたつねぞ
りましたに。イマごせせるとこがし
れてまら。しかし男どもみえな居な
いで、せすことがなら。イマそこなで、
ねてなとごせせつせし。そのうち
イマ、夜があけすに。いし「夜、夜の明る
まで、爰に居てたまるものか。さむく
てこたへられねへ。はやくあけてくん
ませへ。ていし「テ、こせつたもんで



や。ライ番小屋に虎七はぞらんか。ち
やつと来てくれなら(ト)大きなこまし
はやら梯子として来てくれなら。とち
や。客様がさむつせつた。
てよと、忽ち男どもかけ来り(とちせ)且
「イヤ梯子はナマ、上の法印どのへか
那らまんでや、猪でもさすました
か。わし打殺すに。ていし「イヤ猪
えせかしてやつたぞら。あの法印めは

下 編五 毛栗録

ナマ、さけなすやつでや。わし
このうちも洗滌桶かしてくれならと
法印のとこへうてやつたらなマ、
ちんとうちにあらずこたマがひはな
からずは、うしなからたとこして、
かしてさしせらぬ。またなすやつで
や。あつががしてささぬとて、わ
しこほるものか。さすのせんたくつち
とを出してつかひをつた。あの法印つ
らのあつせきに、なんで梯子をかして
やつたぞら。いし「そのさなぐな
はあとしてくれねへ。わつせはあつ
しねやうだ。はやくあけてくれませへ。
ヨ、あびさ。いし「イヤそこな
こがやなす。わしさまがられる。ナマ
虎七どうで。いし「さすやなす
たらはつせが、わしかしたのぢやな
す。あつががしてやつたぞら。いし
「さへへいませ。いし「わし

ちくらくははは。がらなめらつせ
へすな。ていし「イヤのしは、そうた
いしはじけものでや。なんでわしに
詞をかやす。此さごせやうめが(ト)
立ちかゝりひとつぐらはせると(とちせ)且
「いなんでおたつせした。ていし「おつ
たらどうで(ト)ト、またつかみつく。と
ら七もかんしゃくもちたて、きかぬきたなり。
とりあふ、はうばののぞととりま(ト)か
れこれするはキミだ、ていし「おす入りこけて、
おなにくかの穴へころげ落て(とちせ)且
「あつた。いし「イヤ。あつた。あ
つた。いし「こちなこつたか。いし「これ
おな入るさつとさつと。他生の縁でか、
なめりす。いし「さすやうめ。無罪法もの
是から互ひに、さ心算くちたのみ申
す。ていし「おつたぞら。ロッキヤ
はあつたぞら。いし「なだたばこつた

さか。わしつづくすひたさ。いし「
わるくしやれずと、はやくあがるはん
だんをしてくんませへ。さむくてがた
がたふるへやす。いし「ハンニさむ
からず。こななごとなら、蒲團かつ
いでせられよかつた(ト)此内はか
た、そこらさうのぼん小屋にてまわき出
し(とちせ)且「イヤ。たこのま(ト)ハン
ドン。とちせ「イヤ。猪が出せつ
た。ヨ、イ。いし「イヤし、が
出た。ロッキヤ。虎七。こなな
へんこすな。いし「ハンニ此あな猪
がさつこつちてはたまらなす。とちせ
「いし「さすすためた、さむつた
たあながや。そこなで入道ごませす
か。ていし「ロッキヤとひやうま
ごことぞら。さささへなまわめか
つせへし。あめくと猪めが来てさ
せ。ヨ、イ。いし「ヨ、イ(ト)

下 編五 毛栗録

ふたりがあなの中で、いつしやうけんめいの
 ことを出して、わめきたつる。此内しはい
 づくへにけまりしや、たいこのおともやみで、
 をと共がながきまをもち来り、穴へおろ
 すと、下から此をぞしつかりつかまへ、や
 うくのごとにて、ふたりながらひきあげら
 れ、また八がたくとふるへながら、かほも
 からだも、まつくろにうちだらけとなりて、
 さしまへはしりもどれば、**「さした八か、
 どうした〜。先イヤもうとんだめに
 あつた。しよんべんにあきたら、あん
 まりよく月がさまで、い、景色だから、
 うか〜とうらへ出て、猪のちとし穴
 へつづつたわな。さめ〜ま〜い〜」**
 まものぞぬきて、ふるふ内にも、さむさら
 へがたく、さう〜とまをひつかぶり、うち
 ふしけるが、ほどなく夜あけて、そこ〜に
 したくし、此宿を立ちつると、しどうのこ
 とを強次郎へはなして、大わらひしながら、

**「は〜んまこ〜なてへ茶をりせした。
 火をうつてしんせませず」**(ト、ひうちが
 まと石を出してこつち〜) **「はあさん、
 そりやアいつまでうつてゐても、それ
 ぢやア火がつかねへ。ほくちを出しし
 しねへで、石とかまばつかりでは、は
 ー」****「ホンニさうで〜。コリヤつけだけ
 をわすれて来をつた。となりのばんは
 あさん、つけだけをひとつくれさい。
 コリヤあさん、そこらなで、松葉や木
 つさををいらうて来てくれさい。」****「コ
 リヤアありがてへ、かしこまらやした。
 は〜」**はやりもて来てくれさい。たはつ
 けすに、これ〜とまらも、そならに
 して居ないで、そこなでのねばりつち
 を、ひとつかみもて来てくれさい。團
 子の粉ががいにすくないで、たしたせ
 ずだ。**「エ、だんごへつちをさせるの
 か。とはらもねへ。は〜」**わししよんべ

大わらひなれや力をととし穴
 あてのはづれしあごのかけがね



大久手
 十三峠
 條風吹別塚
 ふつ一徑閑
 野々花
 念ふ
 石引逆縁
 竹の海

るに 小屋がけせし出茶屋あまたあり
 て、ちやのぼ〜はやうも出た。休ん

此大久手の宿より、大井まで三里のあ
 ひだ、十三峠といふは此所なり。ふた
 りはやがて、西行坂までよちのぼりた

でござらつせへまし。團ばあさんなん
 ぞあるか。は〜さんだ何もござりませ
 んでなア。先たばこの火もねへな。

ながもるやうでや、させいこ〜なてへ
 たきつけてくれさい。『オットしよろ
 ち〜。は〜その手とり鍋へ水を入れ
 てかけさい。』**「ハイ〜。は〜」**ヤレヤ
 レせはしない。ささいもうちくと、そ
 つちのねさへよらつせへまし。『マヤ
 せうべんした手もあらはずに、だんご
 をこねるのか。コリヤあやまりこの
 とろ〜汗だ。』**「この玉子はまだなまか
 へ。は〜」**いんま此だんごとひとつにう
 でをりませす(ト、たまごとだんごをへ
 うちこみ、ひからびたあづきこねまじし、ヤ
 がてなへからだんごこりちがへ、玉子を出
 してあづきこねた〜とくつつけ、)『サア
 だんごくはつせへまし。』**「コリヤあ
 さんな團子だ。ハ、ハ、ハ、ハ。先はあ
 さん此だんごはくらつづんだ。は〜」**ア
 イひとつ交文ついでござる。『やすい
 ものだ。そのかはり、だんごの皮をひ

いてくはにやアならねへ。マヤ此だん
 ごはねがはまかつつてゐらア。ハ、
 ハ、ハ、ハ、(ト、あづきのついでゐるたまご
 を交文つとときいて、むしやうにくひしま
 ひ、) **「先はあさんあらうア五ツくつた
 から、五文だな。は〜」**ハイまはいは。
**「おれは七ツくつたから、ふたりで
 都合十貳文、ソレよしか〜。サアい
 きやせう。コリアアあせむになりやし
 た。は〜」**ア、コレナ〜、またつせへ
 まし。わし團子と玉子をさがへた。
**「マヤ玉子でや、拾文づ、くれさい。
 あづきをつけたは受けにしませすに。
 』**ハ、ハ、ハ、やつぱり太郎兵衛親だ。
 しかたがねへ(ト、立ちどり十二文づ、ほ
 らひて出ゆく。)

